

多田謡子

反権力人権基金

News

No.11 2017/06/10

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2016年12月17日

第28回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2016年12月17日、東京・お茶の水の連合会館に80名の参加を得て、第28回反権力人権賞受賞発表会を開催しました。発表会では、受賞者の、東京拘置所のそばで死刑について考える会（死刑廃止運動）、篠原弘典さん（反原発の闘い）、沖縄から基地をなくし世界の平和を求める市民連絡会（反基地・平和のための闘い）から講演を受け、基金から多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が贈られました。（詳細は2,3面）

戦争法規、共謀罪、そして本丸の憲法改悪へと、汚濁にまみれた安倍政権の動きはとどまらず、自由、人権と平和は重大な危機を迎えています。弾圧と攻撃は沖縄をはじめ各地で強まり、困難は大きくなっていますが、私たちは頑張っていかなければなりません。



逮捕・長期拘留と闘う昨年度受賞者、山城博治さんと仲間に参加者と基金からカンパ5万円と檄が贈られました。

当基金は本年度の反権力人権賞受賞者を募集し、きたる12月16日（土）に、第29回反権力人権賞の受賞発表会を開催します（4面参照）。受賞者の推薦と、受賞発表会への多数の皆さんのご参加を心からお待ちしています。

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第28回受賞発表会

2016年12月17日 連合会館（東京・お茶の水）

東京拘置所のそばで 死刑について考える会 （死刑廃止運動）



そばの会は、4名の会員の皆さんがかわるがわる登壇してそれぞれの思いをお話になりました。

【平野良さん】平野さんは、東アジア反日武装戦線の事件で多田謡子が宇賀神寿一さん控訴審弁護団に加わり、集会で発言したこと、白いTシャツで登壇した多田は、若く、明るく、澆刺として、5か月後に死ぬとは想像できなかった。その思いを引き継いだ賞を受けてうれしく思うと話しました。

そして、途絶えていた死刑が再開され交流のあった人が突然、刑を執行されるなかで、1997年5月にビラ配りをはじめた、死刑は当然だ考える人、わからない、関係ないと思う人にも、「一緒に考えてみませんか」と呼びかけて、東京拘置所の近くで20年間、ビラを配ってきたとのべました。

【関秀房さん】関さんは、交流のない死刑囚にも、現金と切手が差し入れられる制度を利用して、死刑囚との交流を続けてきました。年一度、70人ほどに差し入れて3分の1ほどのお礼が返ってきます。

スクリーンに、たくさんの葉書や手紙が映し出されました。お金を受け取ったことと、お礼の言葉以外は許されない便りには、検閲で真っ黒になったものも多くありました。関さんは、きれいな絵葉書を使ったもの、記念切手を貼ったものなど、きびしい制限の中でも、獄中の人々の心や様子が分かる、墨塗りになることを承知しながら出した真っ黒の文面からも心が分かったと話しました。

隔離され、隠され、存在を抹殺されている死刑囚が、人として生きていること、存在していることが、スクリーンからひしひしと伝わってきました。

【永井迅さん】永井さんは1審で死刑判決を受けた未決囚との交流を続けてきたが面会できる人たち

の数が減ってきたのは、裁判員裁判が始まって、裁判が拙速化され確定する期間が短くなっているからだと思う、交流、文通の方法について考え悩んでいると話しました。そして、死刑廃止ムードが高まった時期もあったが、20年の活動でも成果はあげていない、死刑執行にあたふた抗議するのではなく、自分たちのペースで自分たちの思いを伝えるビラまきを、道は遠いが続けていきたいと述べました。

【湯浅欽史さん】1990年、死刑廃止をめざしてフォーラム'90sが生まれたころは、今にも死刑制度が廃止か？と思う時期もあったが、近年、その希望が年々打ち砕かれてきたと述べ、やられっばなしでは耐えられない、やられっばなしで生きていても間が持たないと、気持ちを述べました。

湯浅さんが、会場にいる仲間に登壇を呼びかけ、参加したそばの会の仲間13人が演壇に並ぶと会場は激励の大きな拍手で包まれました。

篠原弘典氏

（反原発の闘い）



篠原弘典さんが登壇すると、スクリーンに、1970年、東北大学で原子力を学ぶ学生として、女川原発に反対する漁民の総決起集会に参加して以降、46年間にわたる女川原発反対運動の経過が映し出されました。豊かな漁場を守るために集まった千数百人の漁民。手に手に手作りのプラカードを持ち、今は大震災で無くなってしまった女川の街をデモ行進する漁協の人々と篠原さんたち。海に行く漁船の海上デモ。

豊かな海を守るために、女川の漁民たちは幾度となく立ち上がり、1971年着工、75年運転開始のスケジュールを阻止しました。1977年の漁協総会では、権力者の思惑に反して漁業権放棄に必要な3分の2の票を阻止しましたが、国と東北電力は金と権力の力で切り崩しをはかり、翌年、機動隊のバリケードが威圧するなか、漁業権の放棄が決まりました。原発は1979年に着工され、当初計画から約10年遅れて、1984年に運転を開始しました。

その後も、篠原さんたちは様々な闘いを続けてきましたが、2号炉3号炉と建設が進む中で、女川町は東北電力の原子力城下町となり、原発問題について自由に物の言えない町にされてきました。

2011年3月の東北大震災で女川町は町の7割が破壊されました。原発事故のさい対策拠点となるべきオフサイトセンターをはじめ、街の施設が壊滅的打撃を受けた様子がスクリーンに映し出されました。津波は原発に押し寄せましたが、あと高さ1mのところまで止まりました。もう少し津波が大きければ、女川原発は福島原発と同じ事態になっていたのです。

篠原さんたちは、東北大震災と福島原発事故のあと、住民自身が自由に考え、自由に発言できる場をもとめ、2014年、「女川から未来を考えるつどい」を開き、その後も、ふたたび原発にたよらない女川の復興をみすえてシンポジウムを積み重ねています。偶然、崩壊をまぬかれた女川原発ですが、東北大震災では想定を超える何度もの揺れを受けています。被災した原発の再稼働を2017年4月にも強行する計画を止めねばなりません。

「自分は死ぬとき、オオカミ少年と呼ばれてもよかった。事故が起きる、起きる、と言いつづけたが起きなかったじゃないか、と言われて死んでよかったのだが、実際に大事故が起こってしまった。ものすごく悔しい」と篠原さんは複雑な心の内を話しました。そして、「事故が起きてしまったなかで、今、再稼働を止めねばならない。何よりも、子供たちを守らなければならないと思う」と述べました。

篠原さんが顧問をつとめる放射能問題支援対策室「いずみ」では、子供たちの自主的な甲状腺検査を3年間続けています。半世紀近く原発と格闘してきた篠原さんのやさしさのこもったお話に大きな拍手が沸きました。

沖縄から基地をなくし 世界の平和を求める市民連絡会 (反基地・平和のための闘い)



共同代表として登壇した高里鈴代さんは、受賞の知らせを聞いて、まず賞金があると聞いて皆で喜んだ、それは辺野古と高江、二つの基地反対闘争が大変な時期を迎えているなかで、現地に行きたいけれど、辺野古まで1000円、高江まで1500円を継続して払えないという声を受けて、無料にしたバス代にお金がか

かるからだと述べて、会場から笑い声とともに、緊迫する状況下での闘いに共感の聲が上がりました。

受賞発表会のわずか4日前の12月13日、辺野古沖にオスプレイが墜落するという大事故が発生しました。発表会から3日後の12月20日には、前知事の埋め立て承認を取り消した翁長知事を国が訴えた最高裁判決が予定されています。(注・最高裁は沖縄県敗訴の不当判決を出しました)。そして、闘いの先頭に立ってきた前年度の反権力人権賞受賞者である山城博治さんと仲間たちが、高江のヘリパッド反対闘争で不当逮捕されて、長期拘留が続いているという高里さんの現状報告を聞き会場は緊張に包まれました。(山城さんは3月18日保釈)

沖縄から基地をなくし世界の平和を求める市民連絡会(沖縄平和市民連絡会)は、2000年、沖縄サミットが、「沖縄に心を寄せる」ポーズをとりながら辺野古基地建設を既成事実化する意図で開かれることに対抗して結成された「平和市民連絡会」が発展して作られました。現在は環境、人権、平和など様々な課題を闘う33の団体と個人で構成されています。「地球上の人びとが、自然環境を大切に、限られた資源や富をできるだけ平等に分ち合い、決して暴力(軍事力)を用いることなく、異なった文化・価値観・制度を尊重しあって、共生すること」という「沖縄民衆平和宣言」に賛同して集まった多様な人々が、政党や労働組合など既存の組織が作る運動団体とも協力して活動を行っています。

高里さんは、平和市民連絡会は、すでに2007年から高江のヘリパッド反対闘争に、2014年からは辺野古の新基地反対闘争に、乗用車で毎日闘う人々を運んできたのをはじめ、常に辺野古、高江の闘いの先頭に立ち、闘いを支えてきた。また、その時々、プエルトリコの米軍基地反対闘争や、アフガン戦争やイラク戦争に反対する世界の人たちとの具体的な交流を重ねてきた。こうした多様な闘いが可能になったのは、様々な能力を持つ多様な人々が自らの意思で、自由に参加して、お互いを尊重しながら協力して20年近く闘ってきた蓄積があったからだと話しました。

大きな困難、大きな敵と対峙しながら、もくもくと、人々の闘いに向けた意思を束ねて闘い続けた経験は、沖縄の人々の闘いから本土の私たちが何を学ばねばならないのかをさし示していました。

山城博治さんというかけがえのないリーダーを獄に捕えられながら、闘い続ける沖縄からの報告に、会場から大きな拍手が沸きました。

第29回多田謡子反権力人権賞 候補者推薦のお願い

2017年6月
多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。自薦、他薦は問いません。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

・賞の内容

多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈

・選考基準

国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体

・推薦方法

自薦、他薦とも可。候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailでお送りください。

・推薦締切

2017年9月30日

・推薦受付先

〒105-0004

東京都港区新橋2-8-16

石田ビル5F 救援連絡センター気付

多田謡子反権力人権基金運営委員会

TEL 03-3591-1301

FAX 03-3591-3583

e-mail web@tadayoko.net

お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

12月16日(土)に受賞発表会を開催します。

2017年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせします。)

【第29回多田謡子反権力人権賞受賞発表会】

- 日時 12月16日(土) 午後2時～5時
- 場所 連合会館201号室
東京・御茶ノ水駅から徒歩5分
- 発表会后、同所で記念パーティーを行います。
- 発表会、パーティーとも参加費無料です。



基金継続のための寄付のお願い

基金では趣旨に賛同される皆さんからのご寄付を呼びかけています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】

口座番号 00110-2-356484

口座名称 多田謡子反権力人権基金